

# 論文審査の結果の要旨

氏名 尾 田 識 好

本論文は、日本列島の自然環境が、氷期の大陸的な寒冷・乾燥気候を基調とする更新世から、列島特有の温暖・湿潤気候を基調とする完新世にかけて大きく転換したのに適応して、列島の人類文化・社会が対照的と言えるほど大規模に変化した晩氷期(更新世末期)における北海道の先史狩猟採集民の適応行動様式を、当該期を代表する石器のひとつである小形舟底形石器を保有する集団の技術構造と居住形態分析を通して明らかにした、完成度の高い独創的な研究である。

本論文は 7 章から構成されており、第 1 章では、北海道における舟底形石器研究の現状を整理した上で、舟底形石器アセンブリッジを大形と小形に区分して研究する意味を議論する。続く第 2 章では、舟底形石器に関するそれまでの研究史を整理しながら問題点を抽出し、舟底形石器研究の今日的な意義を再確認して、改めて舟底形石器の形態的特徴(定義と分類)と時間的位置づけ(編年)について再検討を行っている。第 3 章では、以上の議論を受けて、本論文における研究の視点と方法を述べ、近年世界の旧石器時代研究で発達してきた居住形態 **settlement mobility** 分析と石器技術 **reduction sequence** 分析を有機的に接続した新たな研究方法を提案している。

第 4 章～第 5 章では、具体的な分析が展開される。第 4 章では、小形舟底形石器 1 類を、第 5 章では小形舟底形石器 2 類を伴うアセンブリッジを保有する集団の居住形態を扱う。北海道で現在までに認められる小形舟底形石器アセンブリッジ資料を集成・検討し、分析対象として代表的な遺跡を抽出した上で、個別遺跡・石器群の詳細な分析を実施した。分析にあたっては、居住形態の解明を目指すため、地域的な偏りがないように、注意深く分析対象が選択されている。地理的・地形的特徴と舟底形石器を出土する遺跡の分布等から、北海道を北東部・東南部・西南部に大きく区分し、各地域毎に展開する居住形態と適応戦略の共通性と差異が詳細に分析されている。その結果、1 類・2 類とも舟底形石器を保有する集団が、その材料となる黒曜石産地の開発行動に深く規制された行動戦略を採用しながら、同時に相対的に小規模な地域を遊動・回帰する兵站戦略 **collector system** を採用していたことを明らかにした。1 類・2 類の差異は、主として時間差に還元することができ、1 類は晩氷期前半に、2 類は晩氷期後半から後氷期初頭に及ぶ可能性が指摘された。後出する 2 類保有集団の方が相対的に確立された兵站行動を有すると解釈されているが、このことは完新世の定着的生業・行動戦略を採用する新石器(縄文)集団の特性により近く、整合的である。

さらに第 6 章議論において、北海道において現在にまでに試みられている古環境復元研究の成果から推定可能な資源環境(動植物相・石材環境等)と地形・地理的環境(古北海道半島の存在等)を精査し、それら環境条件と人類の応答(適応)関係を検討して、上記の

分析結果の有効性を確認しているが、この研究成果はこれまで明確に指摘されたことはなく、本論文の重要な成果のひとつであると評価できる。従来の既存研究においてはもっぱら考古学的分析に終始していたが、本論文では文化・社会的側面を環境適応の観点から照射することによって統合的に理解し、歴史的プロセスとしての叙述可能性を導くことに成功している。

ただし、本論の分析が舟底形石器に焦点を絞るあまり、同時期に併存していた他の細石刃石器群(集団)との関係態に関する分析と展望が手薄であること、資源開発の具体像に踏み込み不足が見られること等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。むしろ、論文提出者の将来の課題とすべきであろう。

したがって、本委員会は、博士(環境学)の学位を授与できると認めるものである。

以上 1,633 字